
家に帰ると変な生き物がいた。

萌乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家に帰ると変な生き物がいた。

【Nコード】

N7074V

【作者名】

萌乃

【あらすじ】

最近物騒な事件が多いと言われる中、僕の住むこの町は犯罪の「は」の字も聞かないほど平和な町だ。

そんなこの町で生まれた僕は、平凡な日常には飽き飽きしていた。小さいころから憧れだった、お隣さんで一つ上のお姉さんの存在のかなえさんは、僕の彼女だ。

いつもおっとりとしていて、隣にしていると癒される。

でも、デートもしたことなければキスの一つもまだしたことはない。

まあ、それはいいんだ。

そんなことよりも、だ。

この町では、一番賢いと言われている公立の高校から、かなえさんと家の前まで一緒に帰って来たところまでは、いつもどおり。平凡だけど、幸せなひと時だった。でも、今はどうか……。

僕の部屋に、何かが居る……！

僕の勘が、何故かそう言っていた！

最近物騒な事件が多いと言われる中、僕の住むこの町は犯罪の「は」の字も聞かないほど平和な町だ。

そんなこの町で生まれた僕は、平凡な日常には飽き飽きしていた。小さいころから憧れだった、お隣さんで一つ上のお姉さんの存在のかなえさんは、僕の彼女だ。

いつもおっとりとしていて、隣にいと癒される。

でも、デートもしたことなければキスの一つもまだしたことはない。

まあ、それはいいんだ。

そんなことよりも、だ。

この町では、一番賢いと言われている公立の高校から、かなえさんと家の前まで一緒に帰って来たところまでは、いつもどおり。平凡だけど、幸せなひと時だった。

でも、今はどうか……。

僕の部屋に、何かが居る……！

僕の勘が、何故かそう言っていた！

ドクンドクンと、自分の心音が鳴っているのがわかる。

もしかして、空き巣とかかも知れない……。

おそるおそる、僕はドアを開けて部屋を覗いた。

「いらっしやい！ まあ、ゆっくりしていけよ」

何かの声が、した。

ガチャン。

僕は、迷わずドアを閉めた。
そして、深呼吸をしてもう一度開けた。

「どうしたんだ？　はやく、入ってこいよ」
やっぱり声が、した。

何かが居る！

よく見るとそれは変な生き物で、地球上ではおそらく宇宙人と呼ばれる生命体だと、僕は一目で確信した。そして、そいつは僕の部屋でくつろいでいる！

「え、えと…あなたは誰なんですか…？　…てか、ここ僕の家なんです、早く出て行って下さいよっ！」

震える声を出るだけ抑えながら、僕は自分の背の半分もない黄緑の梅干しのような気持ち悪い生物に言った。

「ハッハッハ！　光栄に思え！　今日からここは、俺のマイハウスにしてやるよ！」
なんだこの、うざい生物！

その生物は立ち上がると、ポンポンと僕の足を叩いて言った。

「まあ…、ドンマイ？」

うざい！　ウザすぎるよコイツ…！

と、そのとき玄関のチャイムが鳴った。

「あ、誰か来た」

僕は、玄関のドアを開けてびっくりした。

そこにいたのは、かなえさんだったのだ。

「こんばんは、ゆう君。 夕飯、よかったら一緒に食べない？ たくさん作ったの」

につこりと、かなえさんがほほ笑む。

ああ、やっぱり癒されるなあ…。

「うん！ もちろん……」

僕は今、たいへんなことを思い出した！ 今、僕の部屋には変な生き物がいるんだった！

「ゆう君？ えっと、迷惑だったかしら…」
かなえさんが、悲しそうな顔をする。

どうしよう……。

「おい！ 何をしてるんだー」

「つぶへっ！？ ちょ、どうして今出てくるんですかっ！」
最悪のタイミングで、玄関先のかなえさんと僕の前に奴はムーンウォークばりの滑らかなステップでやって来た。

嫌だ…。こんな奴と知り合いだと思われたくない…！

「ヘイ★ 誰と話してるんだい？」

壁に寄りかかり、生えていない髪を掻きあげる仕草をしながらウィンクしてくる。

若干ハードボイルドなところがまた、僕をいらいらさせる。

「か、かなえさんっ！　僕はこんな奴知りませんからっ！」
あわあわとなりながらも僕は必死に彼女に弁明する。

「…！」

彼女はあああ…と言葉を失っている様子だ。

ああ、平凡かつ幸せな僕の日々、グッバイ……。

彼女は気持ち悪い生き物を指さし、僕に言った。

「ゆ、ゆう君っ！　何これ、凄く…凄く可愛らしいですっ！」

！？

今、彼女は――かなえさんは、僕に何と言ったか。

「これ、ゆう君のペットですか？！　凄く、可愛らしいです！」

“ス　ゴ　ク　カ　ワ　イ　ラ　シ　イ　デ　ス”

どうやら、僕の聞き間違いではなかったらしい。

そんなこと言ったら、絶対アイツ調子に乗るんじゃ……。
かなえさん、綺麗だし。

しかし、僕の予想は見事に外れた。

「ああん？　お嬢ちゃん…、俺のミスウィートボーイと、どういう関係だい？」
ミスウィート……。初耳だな。

「あ、私…かなえって言います。ゆう君とはお付き合いさせて頂い

てます！」

奴の失礼な態度にも、動じることなく彼女は微笑んだ。

「……別れる。——今すぐ早急に別れろっ！……！！！」

くわっと怖い顔をする。

何言ってるんだ、コイツ。

「コイツは……ゆうは俺のもんだあーっ！……！！！」

——おい。

僕はいつのまに、今日初めて会った名前も知らないキモい奴の所有物になったんだ。

おいおい、そんなの誰も信じる訳——

「え……。そう、なの？ ゆう君……」

——彼女が、彼女が本気にしてるー！

「ちょっと待てィ！ 黙ってれば好き勝手言いやがってコイツ……！」
ぐっ、と彼の胸ぐら（多分）あたりを掴んでブンブン振り回す。

「ああん……！ 大胆なスキンシップ……っ。人の目氣にしてくれないと困るぜ……」

彼は全くしょうがない奴だ、と頬を赤らめながらため息をつく。

「ゆう君……。私とは、手も握ったことないのに……グすっ」

えええええー。

「ちょっと待って待って……！」

僕は、今にも走りださんとする彼女の手をぎゅっと捕まえた。
そして、無表情で感情の読めないキモい生物の視線をビシビシ感じながら彼女——そう、本物の僕の真正正銘のミスウィートガールのかねえさんに僕は思いを伝える。

「かねえさん……！ 落ち着いて聞いて下さい……！ 僕はあなたのことが一番大好きです！ あわよくば、キスだって……その先だって、あなたと（結婚）したいんだ……！！！！！！」

——言った……！！ 言えた……！！！！

これで、きつとかねえさんも僕のことを信じてくれるはずだ……！

「えっ……その先……？」

いきなり彼女は赤面した。

「おいおい、ミスウィートボーイよ……。それは、いささか大胆すぎるだろう……」

何故か、ハードボイルド生物も、赤面していた。

「え、と。さっきのは冗談のつもりだったんですけど……ねえ」

あはは、とかねえさんは乾いた笑いをもらす。

ちら、ちら、と玄関を見ながら「そろそろ帰らなきゃ……はは」と彼女はそのくさと出て行ってしまった。

どうすることも出来なかった僕は、仕方なくベットの上で三角座りをして落ち込んでみる。

「はあゝ…」

静かになった部屋に僕のため息が広がった。

「そりゃあ駄目だわ、いきなり、あなたとエロい事がしたい、なんて」

ぽん、と肩に手を置く感触に、僕が横を見ると全てを悟った顔でキモイ（略）が僕を見ていた。

——こんなはずじゃなかった。そう、こんなはずじゃ、…なかった。僕は彼（？）に力なく微笑み、手を振り払いながら言った——

「全部、元はお前のせいだよっ！！！！！！ このやろー！！！！！！」

——結局かなえさんの夕食も食べられなかった…。
ほんと泣けてくらあ。

明日…、かなえさんに謝ろう、うん。
今日はもう寝ようか。

——あれ。

ちょっと待てよ。

「あー！！！！ なんでお前ずっと僕の家にいるんだよっ！ あやうく一日を締めくくっちゃうところだったよ！！！！！！」

ちっ…気づいたか、というような顔で、すでもう僕のベットに潜り込もうとしていたキモ（略）がいったん静止する。

「アレだよアレ。恋のキューピッド的な？」

弓を引く仕草をしながらウィンクし、そいつはニヤニヤした。
それは、とても胸やけがするくらい気持ち悪かった。

——もういいや。

僕は、全てのことについて考えることを放棄した。

それから、僕の家になんかが住み着いてしまったのは言うまでもない。

（後書き）

お久しぶりです！もしくは初めましてこんにちは！

この作品の締めがテキストだった？

そんなこと……あるはず……あ、ホントだ。

今回の作品は、昔書いてた作品なんですが、途中までしか書いてなかったんで、

とりあえず完結させちゃおう、という最低な製作過程がありました。すいません。

しかし、一応頑張りました！と、いうわけで次回の作品もよろしくお願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7074v/>

家に帰ると変な生き物がいた。

2011年10月5日22時00分発行